

方言文献としての『薬師瑠璃光如來本願功德經直読訓點完』(一)

— 紹介と翻刻 —

久保 蘭 愛

一 はじめに

昨年、『薬師瑠璃光如來本願功德經直読訓點完』という外題を持つ折装の資料を入手した。この資料には漢字で表記された経文に対して片仮名表記を主とする振り仮名・送り仮名が多く存するが、次に挙げるように、中央語を反映する文献とはやや異なった表記が見受けられる¹⁾。

(1) a. 我法ノ中(ウヂニ)於(ヲヘデ) (8折)

b. 貧窮(ヒンキヤウ)多苦(タグ) (9折)

本資料は岩手県で書写されたこと、現代の岩手方言を含む東北方言と似た言語的特徴を持ち、近世期の東北方言文献と似た表記を持つことから、岩手方言を反映する可能性があると考えている。本稿では、この資料について書誌情報、書写者と成立の経緯、言語的特徴を中心に紹介するとともに、資料冒頭部分の翻刻を行う。一般に、方言で記述する、あるいは方言を記録する文献は中央語文献に比して相対的に少ないことから、方言文献としての利用可能性を期待しての紹介である。

二 資料概要

二―一 書誌情報

はじめに本資料の書誌情報を示す²⁾。

〈外題〉

薬師瑠璃光如來本願功德經直読訓點完

〈内題〉

本經眞直訓點訂正 薬師瑠璃光如來本願功德經

〈残欠状況〉

一帖

〈保存状況〉

シミ、ヨグレあり。折部分にスレあり。

〈体裁〉

折装

〈書写年時〉

明治28年

〈本文用字〉

漢字。振り仮名・送り仮名は片仮名主体。

〈一面行数〉

一折8行。1行13字。目移りのために誤って一行

飛ばしたと思われる箇所のみ後筆のため5行。また、陀羅尼部分のみ一行13字ではなくなっている。

〈法量〉

タテ約23.6cm、ヨコ全長92.8cm。墨付き57折。

〈表紙〉

ヨコは、約16cm×5枚、24cm×4枚、4cm×4枚、26cm×3枚、3cm×3枚、27cm×2枚：のように長さの大きく異なる紙を非常に多く継ぐ。最も短いヨコは1.5cmのものもある。背面に入佛式護摩行と仏像の配置を書いた紙を糊付けしている。字高約19cm

縹色

〈料紙〉

楮紙

〈書入〉

ところどころに胡粉と思われるものによる修正あり。わずかに朱点による修正あり。後半に擦り消しと見られる跡あり。6折目「莊嚴」の振り仮名が後筆。背面に真言と表白文、明治26年の峯薬師瑠璃光如来と十二神将の修繕についての記録がある。

〈貼付〉

なし

〈奥書〉³

奉書寫時／明治廿八乙未「天+萬」孟正吉旦／巖手縣陸中國磐井郡長嶋村長部／峯薬師堂住／岩淵慶蔵／秀知

〈印記〉

内題下に「東磐長薬師堂持書印」の朱印。冒頭に楷書の「磐淵秀知」の朱印。刊記末に隷書「岩淵秀知」の朱印。

〈その他〉

全体にわたって雲母引きあり。

〈書入〉で述べたように紙背に入佛式に関する記録があるのだが、これ

を本稿末尾に挙げる。〈奥書〉の情報と資料背面の記録から、本資料は、明治26年に行われた峯薬師堂の修繕作業に伴って行われた護摩行に關わって明治28年に作成されたものということが推定される。

二二 書写者と書写の場

言語資料として活用するためには、資料の筆録者の素性・属性を明

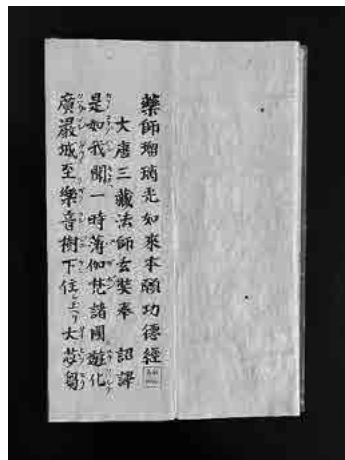


図2 資料冒頭



図1 資料表紙
(いずれも架蔵)

らかにしておく必要がある。そこで、「岩淵慶蔵秀知」なる人物と資料が成立した場について述べておこう。

本資料には末尾に「巖手縣陸中國磐井郡長嶋村長部／峯藥師堂住／岩淵慶蔵／秀知」とあり、また内題下に「東磐長藥師堂持書印」の朱印がある。「長嶋町長部」は現在の岩手県西磐井郡平泉町長部であることから、この地域の記録を見てみよう。

『平泉町史 史料編（二）』に翻刻所収の、岩淵壽太郎氏所蔵「長島村役場沿革記」には次の記述がある（引用に際して旧字を新字に改めた）。

(2) 「長島村役場沿革記」⁴

（前略）組総代十七名 明治九年十一月扱所部内ヲ十七組ト為シ、各組ニ総代ヲ措ク
総代拜命者

村	組番	総代氏名	屋敷 小名	昭和二十五年五月現在 後相続者名及続柄
草	第一番組	菅原賢蔵		
	第二番組	佐藤繁太郎	平石形	孫節郎
	（中略）			
長	第九番組	山平徳十郎	矢崎	孫良治
	第十番組	吉田卯助	中西	孫修造
	第十一番組	岩淵慶蔵	藥師堂	曾孫 壽太郎
	（後略）			

（『平泉町史 史料編二』 p p. 723～724）

この記述から、現・平泉町長部の藥師堂に屋敷を構えていた岩淵慶蔵という人物が確かに明治期に存在したことが確認できる。当地の郷土史研究者の千葉信胤氏（岩手大学平泉文化センター客員教授・平泉文化遺産センター参与）によると、岩淵氏は代々平泉町に現存する「峯

薬師堂」の別当を務めていた地元の名士であるという。

今回（2023年11月26～29日）、上述の千葉氏のお取り計らいで岩淵慶蔵秀知氏の子孫にあたる[]氏にお目に掛かり、岩淵家の菩提寺である見性寺の岩淵家の法名碑を撮影させていただけることになった。菩提寺である見性寺の岩淵家法名碑を見ると、次の記録があった。

(3) 十一代 徳称院中興賢道秀知清居士 大正五年旧八月八日 慶蔵八十二才

この記録から逆算すると岩淵慶蔵氏は天保六年（1835）頃の生まれであり、幕末から大正初めまでを生きたことがわかる。また、法名に「中興」とあり、先祖の記録やさまざまな文献を書写し、村誌編纂に多大な協力を行っていること⁵などから、おそらく岩淵家の中興の祖と位置づけられる人物であろうと推定できる。

ところでこの資料が成立するきっかけとなった「峯薬師堂」とはどのようなことだろうか。「峯薬師堂」あるいは「薬師堂」に該当しそうなものは、この地に少なくとも3つある。中尊寺・瑠璃光院が管理する薬師堂、同じく願成就院が管理する峯薬師堂、そして岩淵氏が別当を務めていた峯薬師堂である。順当に考えればこの「峯薬師堂」とは岩淵氏の峯薬師堂であろうと想定されるが、二一で触れた背面の入佛式の記録（本稿末尾に掲載）には中尊寺の関係者の名前が挙げられている。そのためここで書写されたのかを一旦整理しておく必要があるだろう。ここでは各薬師堂に納められている像の名称と、資料背面の記録にある像の名称との比較から「峯薬師堂」を特定する。

まず中尊寺の2つの「薬師堂」について述べる。瑠璃光院の薬師堂には、本資料背面の記録にある「十二神将」に加え、資料背面に記載のない「薬師瑠璃光如来立像」（本資料の背面の記述は「座像」であり「立像」ではない）「日光菩薩」「月光菩薩」「子安観音菩薩」が祀られており、また願成就院の峯薬師堂には「薬師如来像」とともに資料背面に記載のない「日光菩薩」「月光菩薩」が祀られている⁶。したがって、両者とも本資料の背面に記載される仏像と食い違いがある。

次に岩淵氏の薬師堂について述べる。今回、前述の千葉氏のお取り計らいと[]氏のご許可のもと、岩淵家の管理する薬師堂に入っていた⁷、その内部を拝見することができた。堂内には資料背面の記載通り「薬師瑠璃光如来像」の座像と「十二神将」のみが祀られており、本資料に記載の仏像と一致する。したがって、ここに書かれている明治26年に補修された薬師堂とは岩淵氏が別当を務める峯薬師堂であり、何らかの理由で中尊寺関係者が入佛式の護摩行を行い、これに関係して書写されたのが今回扱う薬師瑠璃光如来本願功德経ということになる⁷。したがって、この資料は代々この地に根付いていた人物によってその生活に近い場で作成されたものと言えよう。

三 言語的特徴

次に本資料の言語的特徴に移ろう。この資料は薬師経を書写したものであり、経文本文は漢字で表記されるが、片仮名主体の豊富な振仮名・送り仮名が見られる。本稿ではこの振仮名・送り仮名の主要な特徴を示す。この資料に見られる仮名には以下の特徴がある。

(4) a. 単独母音のイとエが混同する語がある。

b. 語中のカ行・タ行相当の文字に双点「゛」が打たれているものがまともに見られる。

c. 少数だがアウ型動詞がオウになっている。

以下、それぞれの項目について例を挙げて見ていこう。

三――単独母音のイ・エの混同について

本資料では、単独母音イと想定できるところにエが現れるもの、あるいはその逆の例が見受けられる（すべて語中の例であり、偶然の可能性も高いが語頭の例は見られなかった）。

(5) イ↓エの例（35例。ただし、うち28例が「於いて」にあたるもの）⁸。

a. 於（ヲヘテ）（36折）＝於いて

b. 説聞（トグラキヘテ）（38折）＝説くを聞いて

c. 琰魔使（エンマノツカヘ）（42折）＝閻魔の使い

(6) エ↓イの例（2例のみ）

a. 加（クハイ）（15折）＝加え

b. 帰依（キイスレハ）（20折）＝帰依（きえ）すれば。

この現象は単独母音節にのみに生じており、現時点の調査では子音＋母音音節にはイ段とエ段が交替する例は見られない。また、イ相当をエとしたものが多いが、このタイプは「於いて」をオエテとしたものが35例中28例であり、異なり語数としてはイ↓エのタイプがやや多いかという程度でとエ↓イのタイプとの間にそれほど大きな違い

はないかもしれない（ただ、元のイ・エを保持する例はまだ数え上げていないため、それを踏まえて言及する必要がある）。

右の様相は、現代岩手方言にも見受けられる。斎藤（2001）から該当部分の解説を挙げる。

(7) ■イ段音とエ段音

岩手方言のエ段音は共通語よりやや調音点が高い⁹である。先に述べたようにイ段音が中舌母音^三であるため、イ段とエ段の母音は共通語の場合より調音点が接近している。両母音は、区別が明確に保たれている（キ「木」対ケ「毛」）が、単独母音で拍をなす場合は、対立を失い「エ」に統合する傾向がある。

その統合の様相は方言により段階が異なっている。沿岸部の久慈市・三陸町・陸前高田市では、「イ」と「エ」が完全に「エ」に統合しているが、一関市・安代町・盛岡市等では語例は少ないものの「イ」が保たれている。

例・三陸町・陸前高田市（完全に「エ」に統合）

＝エ（胃・胆・柄・絵）、コエ（鯉・声）

一関市（「エ」に統合する傾向は強いが「イ」も保たれている）

＝イ（胃・胆）、エ（柄・絵）、コエ（鯉・声）

（斎藤2001、p. 9）

この記述によれば、子音＋母音音節の場合はイ段とエ段の区別があるものの、単独母音音節の場合は対立を失う傾向にあるという。本資料の特徴と近いものと思われる。

三―二 語中の力行・タ行の双点表記について

三―二―一 語中の力行・タ行に双点「・」が付されるもの

本資料では、次のように語中の力行・タ行音を中心に双点「・」が付されるものがまとまってみられる¹⁰⁾。

(8) 力行

- a. 白癩(ヒヤグライ)(8折)
- b. 諦(アギラガニ)(3折)
- c. 受不(ウゲズ)(25折)

(9) タ行

- a. 日月(ニヂクハツ)(6折)
- b. 本菩薩(モド)(13折)
- c. 持(タモデリ)(14折)

現代東北方言では語中の力行・タ行子音が有声化することが知られており、ここに挙げた力行・タ行子音の双点表記もおそらくこうした有声化を表すと考えられる。

ところで現代方言の語中の力行・タ行の有声化現象はどんな環境でも生じるのではなく、「母音間で有声化」(井上1968:2000, p. 360)するといふべきものであり、有声化を生じないいくつかの条件があるという。以下に井上(1968:2000, 第十八章)、大橋(2002, 第二章第一節)から、東北方言の力行・タ行の有声化について、それが実現しづらい主要な条件をまとめて挙げる(例はこれら先行研究から引用し、表記は私に改めた)。

(10) 語中のカ・タ行有声化が生じない主要な条件

- a. 特殊拍(促音・撥音・長音)のあと 例: 農家 [noo^hka]
- b. C¹V狭 C²V広 構造の C² 例: 鹿 [ci^hka]¹¹⁾
- c. 派生語・複合語の後部形態素の頭 例: 男の卑称 [ja^hoko]
- d. オノマトペ・漢語・外来語、非日常語 例: ポカポカ [poka^hpoka]

保険 [ho^hkei]

(10 a b) は音環境の問題で、母音間ではない環境を示しており、(10 c) は形態音韻論の問題、(10 d) は語彙的環境の問題である。ただし、上記の条件が力行・タ行の有声化を完全に阻害するわけではない。たとえば井上(1968:2000)は(10 c) に関して [omoda^he] (重たい)、(10 d) に関して [ja^hgan] (薬罐) や [pu^hda^hi] などの例外を挙げている。また、大橋(2002)は促音・撥音に比べて長音のあとで有声化が生じることについて、スペクトル分析の結果、東北方言の促音・撥音は1モーラ分の持続時間を保持するのに対して長音は1モーラ分の持続時間を持たないこと、その結果、当地の長音は特殊拍としての働きが十分でないために促音・撥音と同様の傾向を示さない(例外的に有声化しうる)ことを指摘している(大橋2000, 第二章第一節および第三章第一節)。

このような例外もあるが、有声化を生じる、あるいは阻害する一定の傾向はある。以下ではこの条件を踏まえ、特に音環境に着目して力行・タ行の双点表記の例を検討する。

三二二 音環境によるカ行・タ行双点表記の様相

以下にこの資料に見られるカ行・タ行表記の例を、音環境ごとに挙げる。

- (11) 現代方言でカ行・タ行有声化が生じない・生じにくいとされる音環境

a. 促音・撥音のあと

該当例なし

b. 長音のあと (7例)

設〈モフゲデ〉 (31折) など

c. C^1V C^2V 構造の C^2

3例だけこの環境でも有声化した例が見られる。

聞〈キガント〉 (4折)¹²、請〈ジャウシデ〉 (42折) など

- (12) 現代方言でカ行・タ行有声化が生じる音環境

C^1V C^2V 以外の構造の C^2 (多数)

C^1V C^2V 疾疫〈シヅエキ〉 (46折)

C^1V C^2V 言〈モフサグ〉 (4折)

C^1V C^2V 施〈ホトゴシラ〉 (15折)

現代東北方言では、三二二で確認したように、促音・撥音のあとで有声化が生じないこと、長音のあとではそれに比べてやや有声化が生じること、 C^1V C^2V 構造では狭母音が無声化するため基本的には有声化が生じないことが指摘されているが、本資料に見られるカ行・タ行の双点表記は、現代東北方言においてカ行・タ行が有声化する位置と概ね合致するところに現れると言つてよい状況にある。

三三三 アウ型動詞のオウ型化

本資料の一部に、語彙的にアウ型動詞がオウ型化したかと思われる例が存する。以下の例である。

- (13) アウ型↓オウ型 (3例)

a. 願〈ネコウ事〉 (9折) 願う事

b. 補〈ヲキノウ〉 (14折) 補う

c. 願〈ネコウベシ〉 (15折) 願うべし

ただし、以下にみるように、アウ型を保持する例もある。

- (14) アウ型保持 (ただしすべて確認できていない)

樂〈ネガウ〉 (4折) 願う

このような現象について、現代岩手方言の次の記述がある。

- (15) ■連母音「アウ・オウ」

この連母音は、共通語の所謂ワ行五段動詞の末尾に現れる。

連母音「アウ・オウ」は南部方言地域の一関市方言では、共に

「オー」となり、沿岸方言地域に位置する久慈方言・三陸町方言では、連母音「アウ」が、「カー」(買う)、「ワラー」(笑う)、「アラー」

(洗う) のように「アー」、「オウ」が、「マヨー」(迷う) のように

「オー」となる傾向が認められる。融合は、若干の例外もあるが、

共通語で3拍以上の拍数に対応する語に多くみとめられるようである。

(斎藤2001, p. 10)

斎藤 (2001) の指摘にあるように¹³、本資料に見られるのは「願う」「補う」といった3拍以上の動詞であつて、現代方言に連続するような特徴と言えよう。

三―四 本資料の基盤となる方言

ここまで資料の言語的特徴を3つ挙げたが、いずれも岩手県を含む東北方言で見られる現象であった。この資料が書写された場と、書写者の出身地は現・岩手県西磐井郡平泉町であり、当地で没したことから筆録者はここで人生の大半を過ごしたものと思われる。したがって、おそらく書写者の言語は岩手方言が基盤にあると想定される。

さらに、本資料の言語的特徴は、近世期の東北方言文献にもある程度共通して見られることが知られる。イとエの混同やカ行・タ行の双点表記についていえば、南奥方言的性格を持つとみられる『安産仙翁邦言教諭』（山本2004）、庄内洒落本の類（山本2007）、新発田藩の朱子学講義録（金田1983）、松前藩士の文書（諸星2004）、仙台石巻方言を反映したレザノフ資料（村山1965、江口2010）、東北地方における往来物（米谷2023）など、東北地域に関わる多くの文献に見られることが報告されている¹⁴。

資料の書写者の属性と成立の場といった言語外の事情と、本資料の言語的特徴と現代方言との連続性、近い時代の東北方言文献の特徴との一致など、複数の点から見て、本資料もまた幕末から近代にかけての岩手方言を反映する文献として位置づけられる可能性が高いと考えられる¹⁵。

四 翻刻

ここまで本資料の成立と書写者、資料内の言語的特徴について述べてきたが、今後の活用を期して本資料の翻刻を挙げる。紙幅の関係でここに掲載可能なのは冒頭部分程度に限定されるため、残りの部分は

別稿に譲る。

凡例

- ・旧字体で表記されているものは可能な限り原本通りの字体にした。
- ・合字のシテやトモなどは仮名にひらいて表記した。
- ・振り仮名はルビ表記し、送り仮名は小書きで表記した。
- ・「丁」（コト）は「事」と翻字した。

1折オ

本經眞直訓點訂正

1折ウ

藥師瑠璃光如來本願功德經

2折オ

藥師瑠璃光如來本願功德經

2折ウ

（白紙）

2折ウ

大唐三藏法師玄奘奉 詔譯

2折ウ

是如我聞一時薄伽梵諸國ニ遊化

3折オ

廣嚴城至 樂音樹下住シ玉ヘリ大慈芻

3折オ

衆八千人與俱 菩薩摩訶薩三

3折オ

萬六千及ヒ國王大臣婆羅門居士

天龍八部人非人等無量大眾ニ恭

敬圍繞 而爲ニ法 說ニ

爾時曼珠室利法王子佛ノ威神ヲ承

座從起而偏一肩祖右ノ膝地ニ著薄

伽梵ニ向 曲躬合掌シテ白シテ言サク

世尊惟願 ハクハ 是ノ如ク相類諸佛ノ名號

3折ウ	1	及本大願殊勝功德演説シテ諸ノ聞者
	2	業障消除ノ令玉ヘ像法轉時諸ノ有
	3	情利樂欲スルヲ爲故也
4折オ	4	爾ノ時ニ世尊曼珠室利童子讚言善
	1	哉善哉曼珠室利汝大悲ヲ以我ニ諸
	2	佛ノ名號本願ノ功德説勸請業障纏
	3	所有情拔像法轉時ノ諸ノ有情ヲ利樂
	4	安樂センカノ故汝今諦聴極善思惟
4折ウ	1	當汝ノ爲ニ説ヘシ曼珠室利言唯然リ
	2	願クハトギ我等聞樂
	3	佛曼珠室利告玉ハク東方此ヲ去ル事十宛
	4	伽沙等ノ佛土過世界有淨瑠璃名
5折オ	1	佛藥師瑠璃光如来應正等覺明
	2	行圓滿善逝世間解無上士調御
	3	丈夫天人師佛薄伽梵號シ上ル曼珠
	4	室利彼世尊藥師瑠璃光如来本
5折ウ	1	菩薩ノ道行シ玉ヘシ時十二大願ヲ發諸ノ有
	2	情ヲシテ求ル所ノ皆得令
	3	第一ノ大願願クハ我來世阿耨多羅三
	4	藐三菩提得時自身ノ光明熾然無
6折オ	1	量無數無邊ノ世界照耀三十二大
	2	丈夫相八十隋形ヲ以テ其身ヲ莊嚴一
	3	切ノ有情我如ク異無令

6折ウ	4	第二大願願我來世ニ菩提得時身
	1	瑠璃ノ如ク内外明徹シ淨瑕穢無光明
	2	廣大ニ功德巍巍々身善安住シ焰網莊
	3	嚴スル事ニデクハツニスキリユウミヤウノ
	4	日月於過幽冥衆生悉開曉
		カウムリテ
		蒙意ノ趣ク所ニ隋テ諸ノ事業ヲ作
5	おわりに	

本稿では現・岩手県西磐井郡平泉町で書写された明治期の『薬師瑠璃光如来本願功德經』について紹介し、言語的特徴とともに翻刻の一部を示した。本資料の書写者・岩淵慶蔵氏にはほかの經典の書写もあり、本稿で示したような言語的特徴が見受けられる。この点については別途報告するとともに、本資料の残りの翻刻も東日本方言を中心に見られる語中の有声化現象についての議論と併せて別稿に譲る。

【参考文献】

- 井上史雄(1968)「東北方言の子音体系」『言語研究』52(井上史雄2000「東北方言の変遷」秋山書店によった)
- 江口泰生(2010)「レザノフ資料の日本語」『語文研究』108・109
- 大橋純一(2002)「東北方言音声の研究」おうふう
- 岡田一祐(2012)「潮来婦志」の資料性」『語文論叢』27
- 金田弘(1983)「越後新発田藩儒伊東信斎とその講述筆記―幕末期地方教養層の言語について―」『國學院大學紀要』21
- 川本栄一郎(1972)「幕末の『獄中記』に見られるズーゾー弁とガ行鼻濁音」『国語学』91
- 斎藤孝滋(2001)「日本のことばシリーズ3 岩手県のことば」明治書院

肥爪周二(2019)『日本語音節構造史の研究』汲古書院

平泉郷土館編(2004)『平泉歴史的地名調査事業 地名の旅 第一集 長嶋編』平泉郷土館

平泉町史編纂委員会編(1993)『平泉町史 史料編二』平泉町

村山七郎(1965)『漂流民の言語』吉川弘文館

諸星美智直(2008)『函館市中央図書館蔵『蠣崎文書』に見る松前藩士の音韻状況』『日本語の研究』41

山本淳(2004)『宮城県立図書館蔵『安産仙翁邦言教諭』に見られる音韻現象』『米澤国語国文』33

山本淳(2007)『玄斎文庫本『温泉の垢』とその表記・表現―鶴岡市郷土資料館本文との比較から―』『山形女子短期大学紀要』41

米谷隆(2019)『往来物に見る方言反映事例について―近世後期の東北地方における―』『熊本県立大学文学部紀要』20

【謝辞】

本稿は、2023年度岡山大学国語国文学会において発表した内容の一部である。発表および原稿執筆にあたり、平泉町での調査を行った。その際、千葉信胤氏(岩手大学平泉文化センター客員教授・平泉文化遺産センター参事)および氏に多大なるご協力とご教示を賜った。特に千葉信胤氏が居られなければ現地での調査は不可能であった。また、書誌情報の調査については岡田一祐氏(慶應義塾大学文学部)に大変なご教示・ご助言を賜った。お力添えを賜ったお三方に心より御礼申し上げる。なお、本稿は科研費(研究課題／領域番号23K00557)の助成を受けたものである。なお、資料画像はいずれweb上などで公開する予定である。

〔注〕

1 挙例の際は経文本文の漢字を挙げ、へ内はその振り仮名・送り仮名を原文通りの片仮名で示す。()内に用例の所在を示す。

2 書誌調査については、岡田一祐氏(慶應義塾大学文学部)にご助言・ご教示いただいたものである。

3 改行は「」で示す。以下同様。

4 引用における下線・傍線はすべて筆者による。以下同様。

5 平泉郷土館編(2004)によれば、大正三年刊行の『長嶋村誌』の編纂に多大な協力をした人物であるという。

6 中尊寺案内板および堂内を確認(2023年11月)。

7 中尊寺の僧侶と岩淵家には血縁関係はないが、中尊寺の土地の耕作を長部村民に行ってもらっていたなどの事情もあり、何らかの行き来があったのであろうとのこと(千葉信胤氏のご教示による)。

8 35例からは「例」の読み「タトヒ・タトヘ」は除いた。

9 (6b)の例は「依」のつくりが「衣」であることから漢字を誤ってイと読んだ可能性も考えられる。本資料には、漢字のつくり引かれ、誤ってよみを付したと思われる例がほかにもある。誤読だとすればエーイの確例は(6a)のみである。

10 なお、通常の濁音相当にも同じ双点が示されており、濁音相当と語中のカ行・タ行の有声化音と思しいものと表記上の区別はない。他の文献に時折見られる圏点(岡田2013、川本1972、肥爪2019…第四部第二章などによる)の使用もない。

・通常の濁音相当の表記

a. 楽音〔ガクラン〕(1折)

b. 告〔ツゲ〕(3折)

11 へ、えが狭母音。この環境下では狭母音が無声化するため直後の無声子音が有声化しないという(江口2010)。

12 この形については井上(1968…2000)で終止形キグなどからの「文法的類推による変化」(p. 364)とされている。

13 本資料が書写された平泉町は、斎藤(2001)が記述した一関市のすぐ隣に位置する。

14 資料によってエーイの混同はあるが逆は多くない、サ行・ハ行・ラ行にも双点が付されるものがあるなど、資料間の違いも多いことに注意が必要である。

15 ただし、本資料の言語的特徴には、よく知られている東北方言のシとス、チとツ、ジとズの統合例らしきものは現時点の調査では見受けられない。先行研究が指摘する東北方言的な要素と合致する部分はあるものの、すべての東北方言的特徴が見られるわけではない。

資料背面の入佛式に関する記録

奉修繕峯藥師瑠璃光如来十二神将

明治廿六癸巳陰九月八日入佛式御護摩御祈禱執行

導師 中尊寺 櫻本圓乘院

佛工職 全金色院住職
故觀喜利生院 菅野澄運

圓乘院後住 佐々木亮遵

奉安置御内堂

峯藥師瑠璃光如来十二神将御順座

左		右	
八	七	式	壹
未	午	丑	子
頽你羅大將 摩利支天 矢持	珊底羅大將 虚空藏 [土偏+累] 持	招杜羅大將 金剛手 太刀持	毘羯羅大將 釈迦 三鉈持
十	九	四	三
酉	申	卯	寅
迷企羅大將 弥陀獨鉈持右足揚	安底羅大將 觀音 寶珠持	摩虎羅大將 藥師 斧持	真達羅大將 普賢宝棒宝珠持
十二	十一	六	五
亥	戌	巳	辰
宮毗羅大將 弥勒 太刀持	伐折羅大將 得大勢 劔持	因達羅大將 地藏鉈持左足揚	波夷羅大將 文殊 弓矢持

御本尊藥師瑠璃光如来

御順座ノ歌ニ曰

釈迦如来金剛普賢ニ藥師ナリ文殊菩薩ニ地藏成ケリ
虚空藏摩利觀音ニ弥陀佛得大勢ニ弥勒菩薩ヨ